

成人学習論の研究

——欧米の成人学習論中心に——

胡 逢 蘭

はじめに

現在、中国の電視大学は IT を利用した新たな教育方法を全国に提供している。しかし、それまで先生が一方的に教える教育を受けてきた成人学習者はコンピュータの操作がわからなかったり、主体的に自分で学習するよりも面接授業などで先生に頼ったりすることが多く見られる。これらのことは過去の学習体験を新たにすることなしに、新しい学習環境に適應するのは、成人の学習者にとって困難であることを物語っている。

ここで研究・理論面の整理とともに、放送大学を中心にして遠隔教育における学習者の主体性形成の条件・展望などを明らかにしたいと思う。

第一章 生涯学習の発展

1 歴史の流れ

古くから中国にこういう諺がある。それは「活到老、学到老」である。その意味は、生きる限り、学習をし続けていくことである。つまり、人は生涯を通して学び、立派な人間になるという意味である。人類の歴史上に古くからみられる生涯学習の考えでもある。

日本においても、江戸時代に佐藤一斎は『言志四録』の中で次のように言っている。

「少にして学べば、則ち壯にして為すこと有り。壯にして学べば、則ち老いて衰えず。老いて学べば、則ち死して朽ちず。」

このような古くから人々が馴染んできた生涯学習の考えは人格の発展や精神修養を重視する上で、学習は一生に続けるべきものと提唱している。

現代的な意味での「生涯にわたる学習」は 1960 年ごろ、アメリカやヨーロッパの成人教育研究者によって提起されたものである。フランスのラン

グラン (Lengrand, P.) らの提案が 1965 年にユネスコの「第三回成人教育推進国際委員会」において発表され、当委員会が採択したのが、現代的な生涯教育理念の初の提唱であった。

ラングランは子どもや青年たちだけでなく、大人も内部的欲求、及び外からの刺激でいくらかでも伸びていきうる存在なのだと指摘している。従って、教育を生涯にわたって継続する過程ととらえることが大切だと主張している。リンディマン (Lindeman, E. C.) が指摘した教育は生活であると同じような意味で、ラングランのいう「生涯教育」は①中断なく、生涯にわたる学習を行う、②社会のあらゆるところに自己教育のできる方法や機会が与えられなければならない、ということの意味している。人間は他人につかわれて自分を伸ばすのではなく、自分を「つかって」自分を伸ばす機会が与えられるようになるため、社会や教育に関わる機関などは自己形成に適するプログラムをすすんで提供する役割を果すべきだと思われる。

そして、1996 年に OECD 諸国の教育担当大臣達は「すべての人に生涯学習を」を目標とすることを宣言した (OECD, 2002)。この目標は、揺りかごから墓場までのすべての意図的な学習活動をカバーし、学習活動に参加したいと願うすべての人の知識や能力の向上を目指すものである。

2 生涯学習の動向

生涯教育理念の提唱から 40 年が経過した現在、社会・経済は著しく変化してきた。それは、冷戦の結束から新しい国の建国が進んだこと、そして、産業構造の発展、さらに通信技術の進歩したことによるものと考えられる。政治や社会の状況、産業の発展や技術の進歩は国ごとに大きく違っている。したがって、各国の発展の目標やレベルが違ってくる。それがその国の教育政策や教育目標にも影響を及ぼすものと考えられる。特に、グローバリゼーションおよび技術的進歩に

起因している知識社会の出現は、より高い能力レベルの需要について広範な議論を引き起こしている。教育分野においては、その議論はしばしば一般的には高等教育の達成について言及している。それは、より進化した生涯学習をサポートしうる広範囲の能力の発達に焦点を合わせているものである。このような社会には、情報通信技術を活用する能力、問題を解決する能力、共同作業を行う能力、そして常に学習しようとする能力など、具体的な能力を涵養する強い要請がある。

そのため、これからの社会で生きるため、情報と知識をどれほど有するか、それを生活や仕事にどう効率的に、有効的に利用できるのかを重要なことと認識すべきである。

従って、各国は、すべての人に生涯学習を保障するため、政策を調整したり、経済発展に対応し、学習内容を増減したり、さらに、情報通信技術によって、新しい形の学習を提供する試みをしたりしている。例えば、英国の国民産業大学 (University For Industry) は2000年の秋から全国的なオンライン学習の提供しはじめた (OECD, 2002)。1999年から中国の中央電視大学も情報通信技術による学習システムの設立と運営を開始した (胡, 2004)。

このような要請に従って、生涯学習の内容は、読み書きや算数の基本的な技能の学習から、職業訓練プログラムを経て、専門的な科学技術、一般教養まで幅広く包括している。そして学習の方式から見れば、最初の頃の面接授業を主とした段階から、放送メディアによる学習を経て、現在では情報通信技術による学習まで行われている。

学習方式の多様化により、成人学習はどのように変化しているか、そして、それを支える成人学習論はどのように展開してきたかについて次章で探ってみる。

第二章 成人学習論の展開

人間の発達について、いろいろな視点から研究が進められている。まず、成人の概念は生理、心理、法律そして社会の各分野に分けて見ることができる。心理・社会要素を重視する発達段階論の代表的研究者はエリクソン (Erikson, E. H.) である。エリクソンは、人間の精神や自我の部分を強調し、生涯にわたって人間は成熟しつづけることを示した。人間の発達はエリクソンによると、八段階に分けていることができる。各段階、それぞれ特徴がある。要するに、人間は、人生

のさまざまな段階で心理・社会的危機や課題と出会い、そしてそれらを解決しつづけることにより成長していく。そのため、学校教育あるいは子供を対象とした教育の目標と方法をそのまま成人に適用してしまうことは不適切だと考えられる。成人教育の研究においては成人教育独自の体系を構築することが必要となる。

それに答えてくれているのは主に欧米の研究者達である。その代表的な理論を考察してみる。

1 成人教育の意味

成人にとって成人教育はどのような意味を持っているかについてリンデマンは、その主著『成人教育の意味』(1926年)のなかで次の4つの特徴的性格を示した。①教育は生活である。②成人教育は非職業的な性格を持つ。③成人教育は状況を經由するものであって、教科を經由するものではない。④成人教育の資源は、学習者の経験に求められる。

リンデマンの成人教育論の特徴は成人教育のあらゆるものが生活のなかにあると見る点である。言い換えれば、成人は生活、学習、家庭、仕事、人間関係など人びとの生活にかかわる様々な場面で出会ったことを体験する。そこで知識を学習し、技能を身につけ、そして真の人生はどのようなものかを理解し、認識していく。この一連の結果を、次に出会う経験のなかで、生かしていくのが期待される。

2 アンドラゴジー論

ノールズ (knowles, M. S.) はアンドラゴジーを「成人の学習を援助する技術と科学 (the art and science of helping adults learn)」と定義した。成人の学習の主な特徴として次のような展開が見られると指摘した (麻生誠・堀薫夫, 2002)。

- ①学習者の自己概念の変化：ノールズは人間が大人になるにつれて、その自己概念は依存的なものから自己主導的 (self-directing) なものに変化していく。
- ②学習者の経験の役割：成人の蓄積した経験は学習の貴重な資源となる。
- ③学習へのレディネス：成人の学習へのレディネスは、社会的役割あるいは社会的発達課題を遂行しようとするところから生じることが多い。
- ④学習への方向づけ：成人の学習への方向づけはより即時的である。
- ⑤学習への動機づけ：成人の学習への動機づけはもちろん外的なものも多いが、より重要な動機づけの要

因は内面的なものである。

現代社会には、技術の革新と知識の膨張にしたがい、人々は新しい技術に適應できるよう、そして知識更新のため、いつも、フォーマルあるいはインフォーマルな学習をしなければならない。今日の成人教育を見ると、フォーマルなあるいはインフォーマルな学習はさまざまである。学習者の生活状況や社会的地位により、学習の動機付けも異なってくる。動機付けの違いによって、学習の目標や学習の方法が変わっていく。それがいろいろな学習形態が存在する理由の一つと考えられる。

そして、リンデマンの成人教育の意味とノールズのアンドラゴジー論は、両方とも学習者の経験の意義を指摘した。二人の理論は、成人学習者の社会的経験を学習に役立つというプラス面しか強調しなかったと感じられた。成人学習者は子供と同様に学校教育の経験も持つ。この経験は今後の成人学習に役立つ場合があり、そうではない場合もある。例えば、詰め込み教育された学習者の学習は受動的である。現在の学習者中心の成人学習に対して、詰め込み教育の経験は役に立たないでしょう。経験を役に立たない場合こそ、どうして役に立たない、どうしたら学習が順調にできると一連の学習活動を振りかえて、新しい経験が生まれると思われる。

3 省察的学習

1990年代にはいるとアメリカなどでは、ノールズのアンドラゴジーを土台とし、それを発展させる理論がいくつか提示されるようになった。これらはアンドラゴジーの先に進む (beyond andragogy) と総称されている (麻生誠・堀薫夫, 2002)。その中で注目するのはメジロー (Mezirow, J.) のパースペクティヴ変容論とショーン (Shöne, D. A.) の省察的実践論である。両者とも学習者の省察を中心概念とする学習論である。

メジローにより、意識変容の学習とは、「自己を批判的に振り返ろうとするプロセスであり、私たちの世界観の基礎をなす前提や価値観を問い直すプロセスである」と定義される (Cranton, P., 1999)。つまり、前者は、学習者自身が何か問題と出会うとき、今まで何をやってきたか、これからどうしたらいいのかなどを批判的に自分に問いかけることである。後者は、メジローが主張する考え方である。すなわち、ものごとを判断するとき、その判断の前提とされる条件の根拠を批判的に振り返ることである。

現在、経済の発展と産業改革の需要による多様な教育が提供されている。はっきり目的を持つ学習者が多くいるけれども、多数の人が参加する学習に自分も参加する一目的を明確にしない学習者が少なくない。つまり、自分が参加している学習と自分は自覚していない自分のために必要な学習とずれることがあるという問題がある。このような学習者は、自分がどうして勉強しているか、何のために勉強するのかなど自分を振り返ることが必要とされる。

そして、ある行動の結果を振り返ることよりも、行動の進行中に振り返る必要を指摘した研究者がいる。その研究者はショーンである。ショーンは省察的実践論を提案した。この理論は専門職に期待される実践的な専門能力の形成について展開する理論である。ショーンは、不確かな実践状況において、問題の特質を洞察し、適切で効果的な解決策を創出・実行できることが専門的能力に必要な条件であることに着目している (日本社会教育学会, 2004)。一連の実践活動の進行につれて、実践者が気づかないまま身につける能力があるとショーンが主張した。この能力が順調に働くならば問題が解決できるけれども、そうでない場合には、行われる実践活動の結果を振り返ることにより、能力を洗練させていく。このように能力を身につけ、発揮していく過程が省察的実践である。

このような省察的学習論は、専門家養成に欠かせない理論であるが、遠隔教育において学習参加者にとっても、学習提供側にとっても適用できると考えられる。なぜならば、学習提供側は教育の専門家である。言うまでもないことだが、自分たちが提供している学習内容を学習者が理解できるのか、どんな学習支援を提供すれば学習者に役に立つのか等々、学習支援を実践しながら、省察する必要があると考えられるからだ。

以上述べた成人学習に関する研究は欧米が盛んである。そしてこれらの学習論は欧米の現在における代表的な成人学習論である。放送大学を受講する学習者は成人であるため、ノールズをはじめ、メジローとショーンの成人学習論をある程度適用することができる。しかし、各国の社会文化や価値観が違うため、教育の目標そして教育方法も異なってくるとされる。その上、アジアにある中国や日本は長年にわたり受験勉強のため、詰め込み教育が行われてきた。欧米とは異なった文化・社会・人間関係があるので、欧米の成人学習論がそのまま通用できない面も少なくない

と見られる。

ところで、放送大学の学習者は face-to-face と違う学習形態をとっているため独自の特徴を持つと考えられる。この独自の特徴があればこそ、成人学習者がそれを理解し自分に相応しい学習スタイルを形成することが求められる。そのために、教育機関、教師あるいはチュータからの援助が欠くことができない要素となる。教育機関、教師あるいはチュータは援助にかかわる要素は一体どのようなものかを次章で考察していく。

第三章 遠隔教育における学習者

社会・経済的発展および知識・経済時代の到来、知識更新や知識拡張など知らないうちに仕事や生活に進入してきた。常に学習することが必要となってきた。したがって、国・教育関係の機関は多様な学習を提供している。社会人にオープンする大学も先進国には珍しいことではない。そして提供されたコースは決まった時間帯に学校に行かなければならない。しかし、成人学習者たちは、仕事や生活の関係で学校に行けない場合が多い。情報通信技術の発展により、第三代目の教育—現代遠隔教育が学校に行かなくとも学習も可能になった。つまり、いつでも、どこでも自分のペースに合わせて学習できるようになった。このような遠隔コースを取るのには成人学習者にとって、もっともふさわしいではないかと思われる。

1 遠隔教育の現状

英国の開放大学 (Open University) は、13 の分野から 600 コースを学習者に提供している (開放大学のホームページ, 2005)。専門知識である法律やエンジニアリングや数学などであり、生活や仕事とかかわる福祉や情報技術・コンピュータやビジネスなどであり、そして教養科目としての芸術や言語や歴史などでもある。

アメリカにおいては、職業訓練プログラムと各大学から提供される On-line コースという二種類がある。職業訓練プログラムは言うまでもなく専門知識と技能を提供していると言えよう。各大学の On-line コースを見ると、22 の分野とかかわるものがある。なかには、実務の専門知識が多くと見られる (アメリカホームページ, 2005)。

日本の放送大学の六つの専攻で構成されている教養学部は、2005 年現在約 300 科目を用意している。そ

のなかに、職業上の知識を得るのにも役立つものがたくさん含まれている。近年、放送大学の学生の属性は、初期に高齢者が多かったのと比べると 20 代から 50 代の人々が極めて多数に占めている (放送大学教養学部大学案内, 2005)。

中国の電視大学には中央電視大学によって、全国統一に 10 の専攻が設けられている。そして地方の電視大学は地方の需要に応じて科目を設ける。中央と地方に合わせて 580 以上の科目がある (中央電視大学ホームページ, 2005)。

アメリカには、クリントン政府がインターネットを全国に普及すると提起してから、遠隔学習、On-line 学習が雨後の竹の子のように飛躍的に増加した。中国は 1999 年に教育部が「21 世紀へ向けた教育振興行動計画」を公布した。それにしたがって、電視大学は、今まで利用してきた放送ネットワーク以外に、インターネットを導入し、生涯学習システムを構築することに全力尽くしている。英国と日本はインターネットの導入を今検討中である。

以上の事情から以下のようなことが考えられる。インターネットにより、学習方法がもっと多様になり、もっとリアルになる。学習情報が莫大に増える。一方情報がありすぎて、選択できず学習を順調に進行できない場合があると予測できる。そのため、遠隔教育における学習者の特徴を理解し、それに適応できる学習支援を行わなければならない。

2 遠隔教育における成人学習者の特徴

適応の学習支援を行うため、学習者は学習に参加する理由や学習にかかわる問題などを重要なポイントになると思われる。まず、学習者はどの理由をもって学習に参加しているの次のように考えられる。

- ①産業革新により、職業が細かく分化され、専門的レベルも飛ぶように速く高まってきた。仕事が順調に進められるよう、あるいは転職のため仕事の内容に関係ある専門知識や資格を取ることが必要になる。
- ②社会の発展によって、知識の更新や新しい技術の誕生の速さにわれわれは驚かされている。常に調べる、学習するという気持ちを持たないと時代に遅れることになる。
- ③ある原因で高等教育 (大学教育) を受けなかったあるいは受けられなかった人々は遠隔教育のおかげで学習ができるようになった。その学習を通して、知識を増やし、そして社会的地位を高めることもできる。

④以上の理由とは違って、趣味のため学習に参加する人がある。

学習者の遠隔教育に参加する原因を分析すると学習者が次のような特徴を持つと考察できる。

- ①成人学習者のほとんどは実務経験者であるので社会経験が豊かである。
- ②自己実現意識が強い。
- ③外部的な動機があるが、内在する動機も持っていることがある。
- ④学習者自身が抱えている問題は社会問題に基づくことが少ない。

このような特徴を持つ成人学習者は第二章で紹介したノルズの成人学習論が指摘した成人の特徴と一致すると考えられる。どんな時代になっても成人学習者の特徴はそれほどかわりがないといえよう。ただし、その特徴をつくりだす背景はより進化していると言えよう。

このような特徴があるからこそ、成人遠隔学習者はこのチャンスを大切し、そして自分たちが学んでいることに対してとても真剣で、熱心で、やる気がある。

3 学習者が抱く問題点

遠隔教育にはインターネットの導入と学習資料の大量提供が可能となったため、学習者はより多く、よりよく学習資源にアクセスできるようになった。仕事との関係で特別な研修を必要とする社会人は家庭と職場を離れずに学習ができる。グローバル化の進行により、ある国の学習者は外国の教員や学習者と一緒に学ぶことができる。すなわち、遠隔教育はたくさんの人に多くの新しい学習チャンスを与えるのである。

ところで、学習者はより多くの学習チャンスを得るかわりに、より重い自己責任を負わなければならない。いつ、どこでどんな手段を利用して学習するかを学習者自分で計画・管理し、情報と関連資料をどこからか探し出さなければならない。これは学習者を中心として進めるものだからである。言い換えれば、遠隔教育は、学習者の自主性を強く求めているのである。

それにもかかわらず、学習者の中には、この責任を負うのに消極的なものや不慣れなものもいる。特に、中国の電視大学が現代的開放教育をするようになってからこの問題が著しく出てきた。その理由は以下のよう考えられる。

①過去の自分の学習体験

前述のように、中国では受験勉強のため、学習内容、学習進度などを学校側が決めるという受身の教育

が中心に行われてきた。自分で学習計画を立て、学習内容と学習様式を選択、学習進度をコントロールする方式に学習者は馴染めず戸惑っている。このことは、南通市電視大学の如東県分校の調査を見ればわかる。半分に近い学習者がコンピュータによる学習をしていることがわかった。しかし、二週間に一度の面接指導を望んでいる学習者は69.4%である(張, 2003)。つまり過去の学習経験は新しい学習に消極的な影響を与えたと考えられるのである。

②新しい学習環境(機器、教師など)への適応

現在放送大学で学習している多くの学習者(20代~50代)は、現代情報通信技術の代表であるコンピュータの操作や機能を知らないため、その学習手段としての利用に積極的ではない。それ故に、心理的に抵抗や不安を引き起こす可能性があると考えられる。上海電視大学の調査からは次のようなことがわかる。E-mail, BBS, VODなど現代的学習手段の利用は少なく、利用者は調査人数の半分にいたらなかった(汪ら, 2002)。それは、学習者は新しい学習環境を効率的に利用できないためであると言えよう。

③自己の将来像の展望

中国は発展途上国なので、社会変化が大きいし、競争率も高い。社会はこれからどのように発展していくのかだれにも予測できない。このような変化著しい生活状況の中で、学習者は複雑な状況にどのように立ち向かっていくのか、真剣に考えなければならない。

④パーソナリティ

学習者はそれぞれ、家庭、学校を経て社会に入る。それぞれの人生を歩んできた。そこにあるのは今の自分である。今の自分は将来の自分につながるため、自分の将来を考えると今の自分をもう一度見直す必要がある。

以上述べてきたように、①、②は学習者の主体性に影響する客観的な要素である。他方、③、④は学習者の主体性を影響する主観的な要素であると筆者は考える。それを解明する根拠をほとんどないのが現状である。

終わりに

学習者は学習に客観的要素と主観的要素を抱えている。それが学習者の特徴でもあり、抱えている問題でもある。教育提供側はどのような学習援助を提供すれば、障害なく学習が進められるかという問題に対して次のような対応が考えられる。

①ガイダンスの充実

初めて遠隔教育に取り組む学習者にとっては、授業の受講方式やどのスピードで学習を進行するかなど学習に関するすべてが新鮮である。これこそ学校教育と違う遠隔教育の特徴である。これに対して、英国の放送大学と日本の放送大学は長年の経験を持っている。両大学ともラジオ・テレビ放送ネットワークを利用して遠隔コースを提供している。日本においては、入学の際に、各地の学習センターが半日の時間をとって、学習者にガイダンスする。その内容は、授業の受け方や単位のとり方や図書館の利用等々が含まれている。このような事務的なガイダンスが必要である一方、現代的学習手段の使い方や利用のし方の説明を行う必要もある。そして、コンピュータに関する知識・技能の説明コーナーを設けることが考えられる。

②自主的学習ができる環境と設備

遠隔教育は学習者を中心とする教育であるため、学習者の学習に便宜を図り、学習資料をネット上に提供したり、視聴覚メディアを作ったりし、即時と非即時の両方の方法と手段をあわせて実施している。しかし、これらのことは量的な問題ではなく、質的なことである。学習者にとって実用的な問題であるか否かが学習者の自主的学習の展開と深くかかわっているのである。そのため、学習提供側は学習に関連する各方面において工夫しなければならない。

③カウンセリングの重視

現代社会の生活リズムが速い。その影響は食文化にも至る。このような社会状況の下で、人々は身体のケアが必要であると同様、心のケアも大事であると考えられる。成人学習者も同じ状況の中にいるので心身ともケアが必要となる。忙しい仕事と生活の中で、いかにストレスに耐えるか。このストレスが学習に悪影響を及ぼすとき、あるいは学習上の問題が発生したときに、それらに対処しどのようにすれば学習が続けるかなど学習ケアを行うのはカウンセリングの役割と思われる。

引用・参考文献

- 麻生 誠・堀 薫夫 (2002)『生涯学習と自己実現』日本放送出版協会, p 120
同上, p 112-113
Annette C. Lamb, William L. Smith. *Ten facts of life for distance learning courses*, Tech Trends, vol. 44, 2000
Atman, K. S. *The role of conation (striving) in the distance learning enterprise*, American Journal of Distance Education, vol. 1, 1986
米国 (<http://www.distance-learning-college-guide.com>) 2005. 9. 8 取得
Cranton, P.『おとなの学びを拓く』(1999)(入江直子・豊田千代子・三輪健二訳) 鳳書房, p 204
英国開放大学 (<http://www3.open.ac.uk/courses/bin/p12.dll?A02>) 2005. 9. 8 取得
放送大学「教養学部大学案内」平成17年度第二期
ジェニー・ロジャーズ『おとなを教える』(藤岡英雄監訳) 学文社, 1997
Knowles, M. S.『成人教育の現代的実践』(堀薫夫・三輪健二監訳) 鳳書房, 2002
胡逢蘭「生涯学習から見た中国の電視大学の役割」甲南女子大学大学院論集人間科学研究編 No. 3 2004
Lengrand, P.『生涯教育入門』(波多野完訳) 全日本社会教育連合会, 1971
Lindeman, E. C.『成人教育の意味』(堀薫夫訳) 学文社, 1996
Mezirow, J., *A Critical Theory of Adult Learning and Education*, Adult Education, vol. 32, No. 1, 1981
Michael G. Moore/Greg Kearsley 共著『遠隔教育』(高橋悟編訳) 海文堂, 2004
Moor, M. G. *Self-directed learning and distance education*, Journal of Distance Education, vol. 1, 1986
波多野完治『生涯教育論』小学館, 1989
日本社会教育学会編『成人の学習』(2004) 東洋館出版社, p 36
OECD 著『世界の教育改革—OECD教育政策分析』(2002)(御園生純・稲川英嗣監訳) 明石書店 p 13, 20.
同上, p 48
中央電視大学 (<http://www.crtv.edu.cn>) 2005. 9. 8 取得
張松斌 (2003)「開放教育学習主体学習条件的調査報告」中国遠隔教育, 7: 38-41
Shöne, D. A.『専門家の知恵』(佐藤学・秋田喜代美訳) ゆみる出版, 2001
杉浦美朗『デュエイ教育学の再構築』八千代出版, 2002
汪洪宝・徐輝富・查文英 (2002)「現代遠隔教育教与学研究」中国遠隔教育, 2: 36